

猫の閉塞性肥大型心筋症における僧帽弁収縮期前方運動の発症機序についての考察 2

○大池三千男¹⁾ 犬飼久生²⁾

1) おおいけ動物病院 2) 猫の病院

【はじめに】昨年演者らは、猫の閉塞性肥大型心筋症（HOCM）における僧帽弁収縮期前方運動（SAM）の発症機序について、以下の様に考察した。HOCM では、収縮末期に突出した中隔壁が腱索や僧帽弁と 1 度目の接触をし、直後の拡張初期に僧帽弁が開口し腱索や僧帽弁が中隔壁と 2 度目の接触をする。これらの物理的な接触により腱索や僧帽弁が障害を受け SAM が発症、僧帽弁逆流（MR）を併発していく。

報告した 2 症例の病態はその後進行した。通常 SAM には MR が伴うとされているが、2 症例とも先に MR を発症したが SAM は発症していなかった。この経過は、本接触障害説を支持するものと考えられた。

【症例 1】スコティッシュ・ホールド、雄、初診時 6 カ月齢。突出した中隔壁の肥大が原因の HOCM と診断した。乳頭筋の肥大が顕著であったが、腱索の収縮期前方運動、SAM、MR は認められなかった。その後病状は進行し、腱索の収縮期前方運動を発症し、MR を併発した。しかし、SAM は発症していない。

【症例 2】スコティッシュ・ホールド、雄、初診時 5 カ月齢。突出した中隔壁の肥大が原因の HOCM と診断した。乳頭筋の肥大が顕著で、すでに腱索の収縮期前方運動が認められ、MR は極わずかのみ認められた。しかし、SAM は認められていなかった。その後病状は進行し、腱索の収縮期前方運動に加え、MR が重症化した。しかし、SAM は発症していない。

【考察】HOCM では、動的狭窄を起こす様な突出した中隔壁が、腱索や僧帽弁と物理的な接触を起こす事により、心室中隔壁の心内膜面に瘢痕組織が形成される事はすでに報告されている。今回明らかになった事は、反対側の腱索や僧帽弁が接触障害を受け続ける結果、まず細い腱索が先に障害を受けて腱索の収縮期前方運動が発症する。次に、腱索と僧帽弁が接触障害を受け続ける事で MR が併発する。SAM はその後に続発する接触障害の最終病態と考えられた。今まで考えられていた SAM が起こるから MR が起こるのではなく、逆に MR が先に起こり SAM はその後に続発すると考えられた。HOCM を早期から診断し、経過観察した事が SAM 発生機序の解明に繋がった。